

ISSHO アイヴィ基金 2017年活動報告書

1. 目的

当報告書は、ISSHO が実施する児童養護施設を卒業し、現在大学や専門学校で学ぶ若者に月5000円(年6万円)の生活支援金を送る「アイヴィ基金」事業の効果や課題を確認し、

(1) 支援者への説明(個人情報は一切もれない形にして)

(2) 今後の事業運営の方針の検討材料

とするものです。

2. インタビュー記録

以下の通り、若者を担当する各施設の職員の方に電話またはメールでインタビューを行いました(個人が特定できないように、情報の一部を掲載しています)。

(1) 日々の生活のご様子

奨学金やアルバイトから生活費を得ながら、頑張っているらしいです。昨年度無事学業を終え、希望の職業に就いた方もいらっしやいます。

- 生活費・学費は、新聞配達をすることで得られる奨学金制度で賄っている。休まず働いているが、単位はひとつも落としていない(男性 A さん)。
- 公務員の就職をめざし、専門学校に通学していたが、このほど本人の希望通り就職が決まった。最後の学校での試験も終了。児童養護施設には、学校に提出する書類の書き方や就職試験のための手続きの仕方などについて相談に来ることがあり、その都度生活や学業の様子を聞いてアドバイスをしたりしていた。今年度、目標を持って生活していたこともあり、体調も崩さず学業に集中できたようす(女性 B さん)。
- 日中は、幼稚園で保育士補助として働きながら、夜間は教育学科の二部に通学している。保育士になりたい夢に向かって、意欲的に授業を受けている。忙しい毎日を送っているが、体調管理にも気を使っており、健康を考え自炊を行っており雑穀米を炊いて食べていると話している。今までのところ特に体調を崩すこともなく元気に過ごしている(女性 C さん)。
- はじめての一人暮らしで最初は心細かった様子。施設職員の継続的な励ましもあって、今は楽しく勉学を続けている。学年の学生委員長にも立候補し、「まかない」の出る食べ物屋でアルバイトをしながら頑張っている(男性 D さん)。
- 本人は、中学校時代から保育士になることを希望して、高校卒業後に地元の大学に進学。入学後は勉学とアルバイトなど大変頑張っていたが、夏休みのころから体調を崩し、「休学届」中。復帰に向けて静養中(女性 E さん)。

(2) アイヴィ基金の意義について

生活費・学費以外の支出があるなか、少額でも定期的な現金があることは安心につながっているようです。

- 奨学金を得ているとはいえ、ぎりぎりの生活なので、現金の支援は生活を支えていく力になっている(男性Aさん)。
- 学園としても、退所児童の退所後の様子確認はしているところだが、時間が経過するとともに連絡も少なくなるところ、今回、送金のために毎月連絡できたことは、本人の生活状況の把握の他、本人自身にとっても安心出来たように思える(女性Bさん)。
- ご支援いただいている毎月の5000円につきましては、学校の参考図書の購入や生活費の一部としてとしてありがたく使用させていただき、大変助かっている(女性Cさん)。
- 施設のご担当者が本人の意思を尊重して話し合ったところ、散髪代(施設にいたころは職員が散髪していた)などのほか、これからの実習で買いそろえなければならない、上履き、エプロン、ピアノの教本代などに使っていきたいと話している(男性Dさん)。
- 学生にとっては、携帯電話の所持は必要で、5000円を支援いただくと、その分見通しを得られるので、大変助かっている(女性Eさん)。

3. まとめ

- インタビューにより、学生生活を送っていくうえで、学費や生活を維持する食費・家賃以外にも、携帯電話代や散髪代、教材費などの経費がかかるが、それらをまかなう上で、アイヴィ基金による定期的な現金の支援が助けになっていることが確認できました。
- 今後も若者たちが学業を修了するまで支援し続けます。
- 復学を目指して病氣了承中の方にもご支援を続けます。

以上